

令和4年度

事業報告書

令和4年4月1日～令和5年3月31日

学校法人 大阪学園

令和4年度 事業報告書

I. 法人の概要

1) 教育方針・校是・教育目標・学校像

◇ 教育方針（創立より）

「知育」「徳育」「体育」の調和の取れた全人教育

◇ 教育目標（2020年度改訂）

主体的に行動する“オモロイ”18歳の育成

◇ 学校像（2010年度改訂）

ユニークな進学校

◇ 教育姿勢（2014年度改訂）

創意工夫

2) 設置する学校・学部・学科等

① 学校法人大阪学園 大阪高等学校

② 全日制 普通科 文理特進コース

総合進学コース

探究コース

3) 入学定員、生徒数の状況

① 学則定員 1, 920名 募集定員 1, 320名（440名×3学年）

② 入学定員 募集生徒数（定員） 440名

令和4年度入学 765名

定員充足 プラス325名

③ 生徒数の現状 令和4年度

1学年 765名

2学年 714名

3学年 649名

2, 128名

4) 学園役員並びに教職員の概要

①学園役員 理事は理事長以下 5名

監事 2名

評議員 理事5名+9名=14名

②教職員 専任教諭（校長除く） 52名

常勤講師 37名

非常勤講師 50名

嘱託職員（教員） 7名

職員（会計・庶務） 5名

事務補助員（庶務）	1 名
実習補助員（理科 1）	1 名
技術職員（校務員）	1 名
合 計	154 名

Ⅱ．事業概要

1) めざす学校像（2020 年改訂）

1927 年（昭和 2 年）、私学として 4 番目の旧制中学校として創立以来、「知育・徳育・体育の調和のとれた全人教育」を追及すると共に、時代の変化を見据えた新たな教育目標「主体的に行動する“オモロイ” 18 歳の育成」を 2020 年度より掲げ、ユニークな進学校としての成長・発展を目指しています。

〈めざす学校づくりとして〉

ユニークな進学校

- ① より多くの方々から本校教育に興味関心をいただき、選択していただける学校
- ② 他の教育機関との連携を広げ、学びの多様性を基軸に据えている学校
- ③ 学校生活における今日的課題を生徒と共に克服し続ける学校
- ④ 探究心を基に TRY & ERROR を教育の柱とする学校

〈めざす生徒像〉

主体的に行動する“オモロイ” 18 歳

- ① 自らの意志・判断による、責任ある行動が取れる人物
- ② 人種・性別を超えた魅力ある人物

2) 中期的目標

「センターを超えて、『主体的に行動する“オモロイ” 18 歳の育成』を追い続ける」
そのために以下を中期的目標に据える。

- 1 スクールリレーションズセンター ～生徒・保護者・教育関係者をつなぐ～
 - ① 生徒・保護者・教育関係者をつなぐ広報活動
 - ② 教育を考える情報発信の場となる
- 2 ライフサポートセンター ～「安心・安全・信頼」を構築する～
 - ① 安心・安全な学校づくり
 - ② 生徒・教員のカウンセリング
- 3 キャリアレディネスセンター ～「キャリア・進路実現・選択の力」をデザインする～
 - ① 「生徒」「保護者」「地域（他校）」が相互の学び合いを通してキャリア成熟を高める機会を創出
 - ② キャリア・アダプタビリティ（環境変化への対応力）の育成支援

4 ナレッジマネジメントセンター ～理念・実践・暗黙知の好循環を生む～

- ① 主体性の獲得に向けてのリベラルアーツの獲得
- ② 学習成果の確認と表現の場としての生徒会活動および行事活動
- ③ 風通しのよい、学び続ける組織文化と制度の醸成

【2】振り返りと展望

1) 2001年12月のある日の「三者？に決断を求めた事」を振り返ると

考え方を变えるか、あるいはその必要がないことを証明するかという選択を迫られた場合、ほとんどの人は証明するほうに飛びつくものだ。

～ ジョン・ケネス・ガルブレイス（経済学者） ～

新生大高の改革を構造化する

- ①長期目標：大阪高校は、時代の最先端を歩もうとする学校とのイメージを上げる。

結果 ⇒ 2018年3月「大阪高校記念館講堂改修記念 関西トップリーダー教育シンポジウム」が一つの契機。本校教育の外部発信が加速する。

- ②中期目標：(2005年から2008年)＝共学を考えるならこの時期

☆大阪高校への受験者数の減少に歯止めをかけ、受験者数を伸ばす。

結果 ⇒ 2008年共学スタート 入学者数倍増に

2019年隔年現象からコンスタントな入学生数に（府下私立上位十傑に）

- ③短期目標：(2002年から2005年) 現大阪高校の地域社会におけるイメージを一新する。

結果 ⇒ 地域社会のイメージ新は短期間ではありえなかったが、これを目標に据えたことにより内部教師の意識は少なからず変化した。

この目標設定は、共学化へのモチベーションの源泉ともなった。地域社会のイメージの変遷に注視しながら分析を加えていく指針にもなっている。

2) 2023年5月のある日 未来への展望

我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか

～ポール・ゴーギャンの作品名～

- ①長期展望：大阪高校が関西教育推進の一翼を担っている確固たる評価を得る。

⇒ 次期学習指導要領改訂 2032年度以降の10年。本校視察者数を10倍増へ
2022年度：20名

- ②中期展望：創立100周年を機にスクールポリシーを前面に押し出し専願者増を狙う。

⇒ 次期学習指導要領改訂 2032年度高校入試で本校の専願率を4割以上に
2022年度：文理 19.8 総合 27.2 探究 50.0

- ③短期展望：大阪府内に本校教育を轟かす。

⇒ ロコミの研究：中学校からの出張授業オファー数、オープンスクール参加者数、塾など各種説明会の本校ブース参加者数などを分析し、より内容を発展させる。特に3年目に入った教育フォーラムや中学保護者対象説明会への参加者数増を研究することは必須である。

3) その他

- ① 2022 年度事業計画において「目指す学校像」に向かうために校務分掌を改訂し、「中期目標」を策定しなおした。浮かび上がった課題は取りも直さず“情報の共有”であった。
- ② 2023 年度に向けても“情報の共有から課題の共有”、つまり、今一度、本校の立ち位置と課題を洗い直し、校務分掌を改訂しなおすこととなった。

1 スクールリレーションズセンター Sセンター 成果と課題

1. 入試結果

- ①総受験者数 1,840 専願者数 490 併願者数 1,350
- | | | | |
|--------|-------|-----|-----|
| 文理：受験者 | 418 | 入学者 | 113 |
| 総合：受験者 | 1,334 | 入学者 | 528 |
| 探究：受験者 | 88 | 入学者 | 54 |
- ②専願率 文理 19.8 総合 27.2 探究 50.0

2. 渉外活動

- ①渉外（中学校）訪問 学校数 367 校 訪問回数 948 回 受験者数 1,811 名
- ②渉外（塾） 訪問 100 教室 180 回
- ③オープンスクール 8 月 27 日（土） 800 名
- 10 月 8 日（土） 800 名
- 11 月 20 日（日）午前の部 800 名
- 11 月 20 日（日）午後の部 698 名
- 12 月 3 日（土） 800 名
- 合計 3,898 名
- ④出前授業 52 校 125 講座
- ⑤教育フォーラム
- | | | | | |
|----------|------|-----|------|-----------|
| 第 1 回 来校 | 16 名 | WEB | 31 名 | 総合計 157 名 |
| 第 2 回 来校 | 12 名 | WEB | 19 名 | |
| 第 3 回 来校 | 23 名 | WEB | 23 名 | |
| 第 4 回 来校 | 11 名 | WEB | 22 名 | |
| 合計 来校 | 62 名 | WEB | 95 名 | |
- ⑥保護者対象学校説明会
- | | | | | |
|----------|------|-----|------|-----------|
| 第 1 回 来校 | 23 名 | WEB | 5 名 | 総合計 184 名 |
| 第 2 回 来校 | 26 名 | WEB | 43 名 | |
| 第 3 回 来校 | 47 名 | WEB | 40 名 | |
| 合計 来校 | 96 名 | WEB | 88 名 | |
- ⑦探究コース保護者説明会 来校 31 名 WEB 72 名 総合計 103 名
- ⑧他校より探究コース授業見学（探究基礎・探究ゼミ） 8 校 20 名
- ⑨探究アンバサダー（生徒：文理コース 4 名 探究コース 16 名） 実施中学：6 校
- ⑩「大阪高校の教育実践」 20 号
- ⑪ホームページ 60 件の更新（3 日に 1 回の更新）
- ⑫個別相談会 41 組

3. まとめ

「2,000名の受験者600名の入学者」を目標に活動を行ってきた結果、受験者1,840名、入学者695名、探究コース54名の2クラスという結果となりました。

今年の活動のポイントは600名以上で最大20クラス（探究2クラス）の入学生をどのように確保するのが大きな課題でありました。この課題に対して、私たちがとったプランは、「大阪高校を主体的に選んで進学する受験生を増やすには何ができるか」を考えながら行動するとしました。以下、実行してきた事を紹介致します。

- ・募集定員を440名から550名に増加し、これまで実態とかけ離れていた倍率の解消と、より意欲的に入学試験に挑む受験生の確保を狙いました。入学試験の面接を作文に変更し、大阪高校への入学の思いがより強い生徒の獲得を目指しました。作文を課したもう一つの理由として、作文を通して自分を見つめることを行って欲しいという思いがあり、入学試験を単なる高校入学のための通過点にするのではなく、自分自身の成長のきっかけにして欲しいというメッセージを届ける事にありました。
- ・中学生、保護者から高い評価を得ているオープンスクールが受験生の獲得に与えた影響は非常に大きく、今後もオープンスクール企画運営委員会・PR委員会を通して、中学生、保護者に大阪高校の活動に直接触れて選んでもらうと共に、この企画の運営を通して在校生の成長していく姿を大切にしていきたいと考えています。
- ・教育フォーラムについては、大阪高校から世界へ教育についての「問い」を発信し続けている事が重要だと考え、目の前の生徒のことと共に、未来の生徒の為に教育を語る学校でいる事を今後も目指して活動を行っていききたいと考えています。
- ・中学生保護者対象学校説明会では、大阪高校の教育を伝えると共に、大阪高校の教育について共に考える時間を創る事を目指しました。
- ・出前授業を通して、大阪高校の教育に直接触れてもらうと共に、大阪高校の出前授業をきっかけに中学、高校双方の教員が教育について考える場になる事を目指しました。
- ・探究コースの受験生の増加という課題については、遠回りかもしれませんが、大阪高校の探究の肝である「探究基礎」を知ってもらい、体感してもらう機会を創る事を続けてきました。多くの学校の先生方の訪問や、生徒の組織である探究アンバサダーの活動（中学校への出前授業など）中学生の保護者対象の探究説明などを実施することが出来ました。

4. 次年度の課題

- ・10年後の大阪高校を考えての一年にすること。
- ・どんな存在の学校になりたいのかを考え行動すること。
- ・どんな学校なら生徒は来てくれるのか考え行動すること。
- ・文理特進コース・総合進学コース・探究コースの方向性を示すこと。

以上の課題に向けてチャレンジしていきたいと考えていますが、スクールリレーションズセンターの最も重要なミッションは「つなぐ」事にあると考えています。人と人を「つなぐ」、組織と組織を「つなぐ」、現在と未来を「つなぐ」為に「思い」「Being」を育みながら他のセンターも巻き込んで次年度の活動を行って行きたいと考えています。

2 ナレッジマネジメントセンター K センター成果&課題

1. 自治活動推進部より

① 文化祭実施

	午前	午後
1 日目	全学年リハーサル日	
2 日目	3 年生発表	2 年生発表
3 日目	1 年生発表	2・3 年生金賞上位 2 クラス発表 緑日的模擬店+お化け屋敷(有志)

上記のように、一昨年度との相違点として 1 日目を「リハーサル日」とし、準備をより丁寧に実施したことと最終日の数時間ではありますが、有志生徒により「模擬店的取り組み」を復活実施したことが挙げられます。ただし、今回、費用徴収はしておりません。

保護者に関しては、昨年度も入場不可としました。今年度以降は、保護者来場を可とする際にどのように実施形態を変更するべきかの議論をする必要があります。

② 体育祭実施

東和薬品 RACTAB ドームにて体育祭を実施いたしました。

「第 3 学年」の保護者のみ、事前登録制にて入場を可としました。

リレー種目について、連続の試合実施等の影響から少し体調不良者がでました。

現状、一人一種目の出場しかできていないことと、2,000 人規模の本校の現状のなかで、少しでも多くの種目に出場できる工夫を今年度以降にしなければならないと感じています。

また、文化祭同様に今年度以降には、保護者来場を可とする際にどのような変更をするべきかの議論が必要になります。

③ 生徒会改選

会長候補 4 名（定員 1）、副会長候補 4 名（定員 3）、書記候補 3 名（定員 3）、会計候補 2 名（定員 2）、広報候補 3 名（定員 3）、総務候補 2 名（定員 3）と、合計 18 名の候補者が立候補してくれました。年々立候補してくれる生徒が増加してきていることは喜ばしいことですので、今後も生徒達が「自分たちで色々な学校行事運営に携わりたい」と思える生徒会活動のサポートをしていきたいです。

2. 学習推進部より

① 模擬試験活用

昨年度、実施した模擬試験の「紙返却について、しばらく放置している」という案件が散見されました。時代背景的に、【データでの結果閲覧】ができることは事実ではありますが、改めて「どのような目的で受験し、どのような形で結果を返却するのか」を丁寧に見直していく必要があると考えています。

② ライフデザイン

「総合的な学習の時間」が設置されてから約 10 年が経ちました。学習指導要領改訂において「総合的な探究の時間」と名称が変更し、本校名称「ライフデザイン」の中身についてもブラッシュアップしていく必要性に迫られている時期に差し掛かっています。

昨今は、第 2 学年で取り組んでいた「クエストカップ」への取り組み姿勢も停滞を見せ始めているのが現状であると捉え、今年度は「Ring」という新しい取り組みへの方向転換を致します。これを機に、改めて「全担任が主体的に運営できるライフデザインの構築」を目指したいと考えています。

また、ライフデザインの枠組みを「単年度」の取り組みとならないように、「第 1 学年」から「第 2 学年」へ、「第 2 学年」から「第 3 学年」へ、次年度にも繋がる取り組み方も模索していきたいと考えています。

③ 夏期講座

2011 年度から全面改訂して取り組んだ「夏期講座」は、本校オリジナルの取り組みに育ってきました。開始当時は、いわゆる「受験対策系」の座学が約半数を占めていたにも関わらず、時代の変容なのか、教員の思考の変容なのか、昨今はいわゆる「花開く型（興味関心を引き付ける入門系）」が約半数を占めている状況となっています。この現状が、現在の大高生のために最善であるのかを検証していく必要性と共に、取り組み開始時に掲げていた「教員の創意工夫の機会（自己研鑽の機会）」としての捉え方を改めて周知徹底し、新しい形の夏期講座を模索したいと考えています。

3 ライフサポートセンター L サポートセンター 成果と課題

1. はじめに

ライフサポートセンターは、安心・安全なクラスや学校で本校における教育活動やスクールポリシー、学校目標でもある「主体的に行動できる“オモロイ”18歳の育成」の基盤を担うセンターである。クラスや学校などが安心・安全な空間であるからこそ、様々な経験が実現でき、自己肯定感や自己有用感を高めながら他者との違いを認め合い信頼を構築していくことができる。

また、生活指導を巡る状況は複雑化・多様化し、ネット社会の到来や SNS の普及などによって、学校における対応は年々難しくなっている。生徒の心理・発達に対する理解や問題の構造的な把握、発達障害や性的マイノリティ、ヤングケアラーなど多様な背景を持っている生徒など、専門性を高めることが重要になってきている。本校では今年度から SSW（スクールソーシャルワーカー）を加え、教員の研鑽を深めるとともに、SC（スクールカウンセラー）の方々とチーム学校として生徒の成長をサポートしていきたい。

2. 生活サポート係

① ルール・マナー教育

基本的な生活習慣を身につけるために、日々の遅刻指導を実施している。指導ではなく朝学習の振り返りと対話を重ねている。また、身だしなみでは、女子の化粧やスカート

の長さで注意する生徒が増えてきている。なかなか歯止めが利かないのが現状ではある。

マナーについては、まだまだ意識が低いので、電車の中で大きな声で話す、騒ぐ、や道いっぱいに広がっているなどの外部からのクレームが入る。校外でみられるということは、校内でもその振る舞いがあるだろうから学校生活から問いかけていきたい。また、生徒会執行委員やマナー委員の活動に期待したいと思う。

② 安全教育

▶SNS 講習会

▶交通安全講習会 (9月) 出席率 80 %

自転車登校登録者対象 (1年 238 台、2年 267 台、3年 314 台) に体育館アリーナにて茨木市ドライビングスクールに講習の依頼をし、自転車をはじめとした交通ルール・マナーについて考え、身につける機会を設けた。

▶薬物乱用防止講演会 (11月)

▶QU アンケートの結果をもとに、研修会

▶防災係

防災啓発ポスターの作成や防災に関する知識の習得、ハザードマップの見方・使い方、防災備品の確認・使用を目的に夏期講座「防災ゼミ」を実施する。

また、防災研修会として、新任の先生方 (勤続 3 年以内) を対象に実施。自然災害に対する防災・減災の基礎知識を身につけるとともに意識改革を目的とした。

教職員に対しては研修や講演会の実施、生徒に対しては防災委員会を主体とした生徒への啓発など、あらゆる側面から、防災に関する知識・理解を深め、行動できる力を身につけていく必要がある。防災に関する HR や防災講演会を含め、年間計画の作成をより明確なものとしていかなければならない。

③ 生徒サポート係

○メンタルケア

▶コミュニケーション力アップゼミ (月 2 回水曜日)

年間 20 回実施・参加者 17 名 総合満足度平均値 4. 21

▶担任力発掘ゼミ (月 2 回木曜日)

年間 20 回実施・参加者 17 名 総合満足度平均値 4. 29

▶7 月後半と 8 月前半に個別セッション実施 (個別の相談や情報提供)

▶研修会 (しんどう生徒との関わり方 モデルケースを通しての勉強会) 12 月

スクールカウンセラー、養護教諭、生徒相談係を中心に、スクールカウンセリングとは何か？また、困難を抱える生徒との関わり方としてワークショップを行い、対話の中で情報共有する。

< 課 題 >

授業の振り替えなどで人数の少ない日があったり、空き時間に集まるためにメンバーが固定化された感があったりしたことが課題としてあがっており、来年度、もっと多くの先生方に参加してもらえるように、アナウンスを活発にして多くの先生に活動を知っ

てもらい、気楽に前向きに学び合える環境を整えていきたい。

＜ 成 果 ＞

「対話を通じて他クラスの取り組みや、他者の考えを聴くことにより、違いから学ぶことで多面的に物事を見ることができるようになった。」「学年や教科の違う、普段話すことのない先生方との交流の大切さを感じた。」などのリフレクションがあり、クラス運営に生かされている。

○カウンセリング

▶カウンセラーと会った生徒（4月～2月）

1年生…20名（＋保護者5名）、

2年生…16名（＋保護者2名）、

3年生…19名（＋保護者3名）

▶研修会（困難を抱える生徒との関わり方 モデルケースを通しての勉強会）12月 24名出席

スクールカウンセラー、養護教諭、生徒相談係を中心に、スクールカウンセリングとは何か？また、困難を抱える生徒との関わり方としてワークショップを行い、対話の中で情報共有する。

＜ 課 題 ＞

A) カウンセリングの予約方法の再検討

B) カウンセリング後の担任との共有の場

C) 教員研修の継続実施

D) 年度当初に全教員に対して、「大高のカウンセリング」について共有

E) スクールソーシャルワーカー（SSW）との連携（2023年度より導入決定）

④キャリアレディナスセンター Kセンター 成果と課題

1. 総 括

一般的なキャリア教育が生徒を対象とするのに対して、本校では「生徒・教員・保護者・地域」4主体のキャリア形成に関わる種々の取り組みが実施されてきた。また、シラバスに則ったガイダンスやHRの実施等、単発的なイベントとしての要素が強い学校が多い中、10以上のプログラムを用意し、外部との連携を通してまさに「生きた」活動を実施してきたといえる。それらの活動はいずれも魅力的で潜在的な可能性に満ちている一方、「組織的かつ継続的」という点においては改善の余地が残されている。また、Cセンターとしてのキャリアに関する体系的なシラバスが策定されていないことで、各学年のガイダンスやHRなどへのサポート力が弱く、「計画性」という点でも課題が残っている。

2023年度は組織的な取り組みを推進するため以下の4点をすでに実施し、組織体制の刷新を図っている。

- ・すべてのプログラムにおいて年間計画を3月段階で視覚化し、全員で取り組むもの、チームで推進するものを明確に位置付けて情報共有を行った。
- ・両部長は部署管轄のプログラムの進捗状況を把握し、円滑な運営にむけて教員への働

きかけを意識的に行う。

- ・CセンターのグループLINEを通じて、「意識統一・情報共有・確認事項」を行う。（動画や写真などで各プログラムの様子を知る機会としても活用）
- ・センター長と両部長の連絡強化

2. 各プログラムの成果と課題

A. キャリアデザイン部

① CHOLA ゼミ・ラボ

成果 ・立ち上げから3年経過し、これまでつながりのあった外部団体との連携がさらに強化された

- ・学内で「CHOLA ゼミ」の名称が浸透

課題 ・外部団体との交渉後にclassiを通じて随時情報が流れる形式を採用→年間プランや意図、情報の不明瞭化につながった

- ・「〇〇講座」と案内→その分野に直接興味のない生徒の意欲喚起に繋がらず、受講生減少
- ・講座の開講に実施計画が明記されず担当教員の割り振りが困難。生徒にとって突然次回予告が提示されるので、意欲の継続が難しい
- ・受講後のフォロー体制がなく、参加するだけで修了
- ・参加者約200名の30%しか指定校推薦の際、理由に関連付けていない

② LNU（地方国公立への進学サポート）

成果 ・2022年度入試結果9名

- ・水産大・鳥取大・島根県立大・兵庫県立大・広島大・大阪大・高知工科大・富山大・名桜大（浪人生含む）。チャレンジ生徒数は17名
- ・LNUプログラムの集大成として3年生メンバーの選定や個別サポートに寄与することができた

課題 ・私立・国公立問わず進路意識の幅を広げる一助になる取り組みだったが、合格が目的となっている

- ・1年生からの継続的かつ具体的な働きかけが不十分（外部団体の活用、講習等、活性化する必要性あり）
- ・1学期にLNUを告知（20数名参加）から全体活動に乏しく、9月以降は個別対応。活動計画の見直しが必要

③ 薬・医療看護プログラム

成果 ・各学期2回程度、外部説明会や実習体験の案内を実施

1学年は心構えとオープンキャンパス、2学年はオープンキャンパスと模試情報など、3学年はオープンキャンパスと受験情報

- ・合格体験記は、現役看護系学生や現役医療人など卒業生との対話を通じて医療人を目指す者としての意識を高め、将来の自己像を明確にする場となった。看護医療系69名（このうち看護系進路37名）

課題 ・60～100人ほどの生徒をサポートしてきたが、企画や立案は特定の教員に

紐づいている

- ・分掌に紐付けて組織化を図る過程で担当者の異動が続き、3年間を見通した体系が崩れてきつつある（指導計画を再度、練り直すことが必須）
- ・看護実習等コロナによる停止が続いてきたが、3年前に戻っていく可能性もあり、生徒のマナーや対応含め慎重な対応も求められる

④ 異文化交流・海外進学

成果 ・マレーシアサポートセンター ・Sunway University

・Taylor 's University ・INTI ・Wollongong University

・台湾進学センターを中心に、進学サポートおよび大学との提携を媒介

・直近3カ年の海外進学者 2020年度 マレーシア3 台湾2 その他1

2021年度 マレーシア5 台湾0 その他2

2022年度 マレーシア4 台湾0 その他3

課題 ・年間および3年間の企画と意図が不明瞭、枠の作成を通して業務内容の整理が必須

・コロナ規制の緩和により、海外との交流機会増加が予想され、3年前の活動を再度整理し、発展的な可能性を模索する

→大阪府グローバル体験 来年度受け入れ再開

トビタテ留学ジャパン 夏期海外研修実施は2023年より再開

・生徒への案内とマインドセット、保護者への理解など深く広く展開する施策を考える

→生徒と保護者対象進学説明会 年2回

→外部プログラム紹介説明会 年2回開催

⑤ 高大連携

成果 ・受験機会や学費の減免など幅広い分野で生徒サポート体制の構築が進んだ（各校との協定内容はCセンター保管）

課題 ・協定内容の把握および、受験校決定に際して必要な働きかけの確認

B. 進路推進部

① 指定校・データ処理

成果 ・進路獲得で悩んでいる生徒、獲得困難な生徒など多様な生徒の進路サポートの一助となれた

・学校推薦型選抜として信頼に関わる指定校推薦枠を大きなミスなく運用することができた

課題 ・一部大学など先方から、大阪高校の生徒に対する厳しい目が向けられている（成績低迷および留年・退学等）。進学前教育と併せて考える必要がある

・学内の選考に関わる部分については、今後のあり方を議論する必要性あり

・業務の流れ一覧の精査と、Cセンター全体の業務として組織化をする

② 進学前教育

成果 ・10月合格者決定から1月の進学先関係者との面談までサポート体制が構築できた（詳細はCセンター内に書類保管）

合格者向け説明会→11月2回講座→冬休み課題→大学、専門学校の方と面談 →関関同立合格者へ過去問を用いたサポート

- 課題
- ・特別講座を無料実施で運営しており、講師の確保が難航する場合がある
 - ・特定の教員の人脈で講師の確保が出来ているのが現状
 - ・学外へ連れて行く取り組みの模索
- 一部大学から12月に面談を繰り上げて、ゼミ生と接触可能との提案あり
- ・講演会は外部から講師料を捻出する難しさがあったため、2回講演会を開き全員参加できるようにした。

③ 外部ガイダンス

- 成果
- ・全員の生徒が同じ話を聞く貴重な機会として、必要な取り組みを学年ごとにヒアリングして実施できた
 - ・けいほう、ライセンスアカデミー、キッズコーポレーション等、各業者の強みを生かした企画から精査することができた
- 1年…秋冬で学部および職業理解のガイダンスで2回実施（けいほう・きつず）…学内実施
- 2年…文理・探究はライセンスアカデミーとDPから見た「大学の学部・学科選択」、総合は志望校の学部・学科理解
- 3年…6月に文理はライセンスアカデミーとDPから見た「大学の学部・学科選択」
- 総合・探究はさんぼうと「志望校の学部・学科理解」鶴見のハナミズキホール
- オープンスクールへの参加を促すため、APと対話をキーワードに面談を取り入れた
- 課題
- ・運営の主体が学年とCセンターで不明確となり、一過性のイベントになる可能性を秘めている
 - ・次年度2023年度以降、Cセンター主導のプログラムとして学年ごとの計画を立て、進路研究のシラバスとも連動を図る

④ 進路研究

- 成果
- ・学年の意向も聞きながら、時期ごとに必要な取り組みを実施することができた
- 課題
- ・Cセンターとして体系的な進路に関わる活動が策定されておらず、週1回の「進路研究（総合コース）」の取り組みに計画性が乏しくなった
 - ・センター発信の企画や指導案を担当が実施する形態のため、狙いや指導方法などでクラス間の差が生じた

⑤ 就職

- 成果
- ・5月の就職希望者説明会に始まり、入社手続きまで業務の流れに沿って生徒をサポートすることができた（資料はCセンター内保管）
- 5月 就職希望者説明会～
- 入社手続き等の書類を内定者に手渡し、説明

- 課題
- ・コロナ禍で抑えられていた高卒求人数が、今年度以降は増加傾向にあり、さらなるサポートが必要
 - ・指定校求人の中で、応募数の多い企業は「学力」「出席状況」「コミュニケーション力」が高い生徒でなければ合格できず、サポート体制が不足
 - ・公務員試験に合格するために SPI や教養試験対策が未整理

Ⅲ. 財務の概要

学校法人会計

国又は地方公共団体より補助金の交付を受ける学校法人は、経理内容の透明性・信頼性を確保すべく、「私立学校振興助成法」において、計算書類を作成し、外部監査を受けて所轄庁へ届出することが義務付けられています。

この従うべき基準が、「学校法人会計基準」であり、学校法人の目的に合致し、私学助成を受ける学校法人が遵守する統一的な会計基準として定められました。この基準に従い、本学園も「事業活動収支計算書」「資金収支計算書」「貸借対照表」などの財務書類を作成しています。

1) 資金収支計算書

① 収入の部

前年度繰越支払資金を除いた当年度の収入額は 20 億 4 万円となりました。

入学者数は 34 人増の 765 名、生徒数は 130 人増の 2,128 名となり、学生生徒等からの授業料や入学金等の学生生徒等納付金収入は 9 億 9,241 万円（前期比+6,861 万円）、入学検定料等の手数料収入は 3,718 万円（前期比△286 万円）となりました。

補助金収入は 9 億 6,652 万円（前期比+4,493 万円）で、大阪府経常費補助金収入 5 億 3,700 万円（前期比+2,124 万円）、授業料支援補助金収入 4 億 2,331 万円（前期比+2,317 万円）交付されました。

施設・設備の国庫補助金収入が 117 万円（前期比△46 万円）交付されました。

雑収入では退職金財団交付金収入が 4,682 万円ありました。

② 支出の部

翌年度繰越支払資金を除いた当年度の支出額は 16 億 8,122 万円となりました。

人件費支出は 10 億 1,884 万円（前期比+6,145 万円）となりました。

教育研究費支出及び管理経費支出は 3 億 3,773 万円（前期比△1,707 万円）となりました。

施設関係支出は 7,528 万円、設備関係支出は 4,748 万円となりました。

上記の結果、翌年度繰越支払資金は 16 億 8,935 万円（前期比+3 億 1,923 万円）となりました。

2) 事業活動収支計算書

事業活動収入計は 20 億 5,602 万円、事業活動支出計は 15 億 7,076 万円となりました。

① 教育活動収支

収入は、学生生徒等納付金、手数料、寄付金、経常費等補助金等で 20 億 5,483 万円（前期比+1 億 3,731 万円）となりました。支出は、人件費、教育研究経費、管理経費等で 15 億 6,786 万円（前期比+5,349 万円）となりました。

なお、教育研究経費および管理経費に含まれる減価償却費は 2 億 1,712 万円となりました。

② 教育活動外収支

教育活動外収支差額は 9 千円となりました。

③ 特別収支

臨時的な収支を表す特別収支にはその他の特別収入として施設整備補助金 117 万円、資産処分差額として建物処分差額 289 万円があり、特別収支差額は△172 万円（前期比△313 万円）となりました。

④ 当年度収支差額

「教育活動収支」「教育活動外収支」「特別収支」の合計、基本金組入前当年度収支差額は 4 億 8,525 万円（前期比+8,043 万円）となりました。基本金組入額合計は 3 億 1,847 万円（前期比△4,310 万円）、当年度収支差額は 1 億 6,677 万円（前期比+1 億 2,353 万円）となり、前年度繰越収支差額と基本金取崩額を合わせた翌年度繰越収支差額は△10 億 6,933 万円（前期比△1 億 6,677 万円）となりました。

以 上